



第 238 号
(9月)
2016

幼稚園での自制心の育ち

学校法人内丸学園 理事長 坂本 洋

「いじめ」による中学一年、二年の多感な子ども達の命が、殺傷であったり、自殺であったりする悲しい事件が絶えない状況が続いております。かけがえのない人命の尊厳さや道徳意識が希薄で自制心が働かない状態で事件は起こっているようです。

社会性規範や自制心、人間としての心の育ちはどうなっているか非常に心配される状態です。人間の心の育ちは、知識として教えるものだけではなく、ご家庭や幼児教育施設で、自分の思いや自分の存在主張だけでなく、ほかの人の思いや感情をどう受け入れ、理解できるかを体験的に気づき、考えられることを中心に育つものと言われます。

そこには子どもとご家庭での保護者や施設の教師との信頼関係もとに、家族やお友達の誰からも認められ、大切にされていること、自己肯定感がにじみ出る環境でないと育たないことを最も大切な基本として示されております。ですから幼稚園では、クラス担任の重要な役割は、子どもと共にそのような環境を作り、働きかけることが大事なこととなります。

このところ、我が国の教育制度の中で上記事件のように人間としての心の育ちが育ってないことが注目され、教育指導要領の見直しが行われております。

園報でも度々話題にしております、非認知能力の育ちです。非認知能力とは、自制心、我慢強さと

かやりぬく力、集中力の育ち、他者との協同する力と言われます。中でも自制心、自分の感情や欲望を適度に抑えコントロールする力の育ちが注目されます。

近年、米国スタンフォード大学に設置されている四歳の幼稚園児186人に行ったマシユマロ実験の自制心の育ちに関する論文が、その後の追跡調査を含め注視され、幼児期における非認知能力の保育指導は、教育的に最も効果ある教育投資であることが証明されて、また、幼児期にその育ちが進まないとし生涯人生の成功達成が低いことやその育ちの臨界期が幼児期であることが指摘されております。

さて、それではどのようなかわりが自制心を育てるでしょうか。過剰に管理された子どもは低い(過剰な管理育児は避ける)。子どもの自主性を基本に選択することを見守る(結果が自分の選択が良かった報酬が与えられ満たされる体験。逆も体験しフォローする)。教え理解させるより繰り返し記憶に残すかわり(習慣化、ルール化とも言われ、朝○時には起きる。食事の前に甘いものは食

べない等の簡単な繰り返し継続できるもの)。頑張れる水準を明確に示し少しずつ引き上げる(新しいことに挑戦する)。このようなことが事例検証で自制心の育ちとなることが分かり、私も幼稚園でも日々の活動の中で実践しております。

九月早々から運動会行事への取り組み(プログラムの選択や役割の話し合い)が、はじまりました。お友達との運動会遊びや練習での競争の勝敗やチームのまとまり等悔しい思いや粘り強く頑張った体験や喜び、このような教師がかかわる意図的経験が非認知能力の育ちにも最も効果あるものと信じております。



A クラス伝統 “マットとり”

感情を言葉に

園長 坂本 信行



一歳児や二歳児の保育で気を付けていることは、友達をかじってしまふ行為である。子どもは、かじる加減が分からないので、かじられた子の腕には歯形がついてしまふ程である。二十七年年度園内でのこの種の件数は、三歳児が一件、三歳未満児が六件発生し、未満児担当保育教諭の重要な指導内容になっていく(ヒヤリハット報告)。

これは、かじってしまう子もかじられた子も自分の気持ちを言葉で表現することがまだできないからである。例えば、○さんが車で遊んでいた時、△さんが「貸して」と言わずに黙って取るうとすると、○さんが「イヤ」と言わずに反射的に△さんをかじってしまうのである。

八月の園内研修で「ことばを育む」というテーマで、資料を作成し、それに基づいて話す機会があった。その際、「感情の社会化」についても触れた。

「感情の社会化」とは、0歳児や

一歳児・二歳児は、まだ自分の気持ちを言葉で表現できないので、例えば、子どもは不快感情を泣いて訴えるがその場合、その行動に対して大人は、「お腹がすいたの」とか、「おしっこが出て気持ち悪いの」とか子どもの気持ちを推し量り、子どもの気持ちを認め、ことばをかけながら対応する。このような経験の積み重ねによって、気持ちを言葉で表現できるようになる。このような気持ちを言葉で表現できるようにするプロセスを「感情の社会化」というている。ことばで表現できるようになれば、自分の気持ちを相手に伝えることができるようになるし、自分の行動を調節できたり、自分の考えを言葉で組み立てたりできるようになる。

一方、脳の働きから検討すれば、脳は三層構造になっていて、中心から脳幹部、大脳辺縁系、大脳皮質で構成されている。そして、感情を司っているのが大脳辺縁系で、

ことばを司っているのが大脳皮質の言語野である。ところが、ことばは言語野だけが働くのではなく、脳幹や大脳辺縁系がスムーズに働いて大脳皮質が活動できるということである。とすれば、「かじってはダメ」と注意するだけでなく、かじってしまった子の気持ちを推し量り、「車をとられて嫌だったんだね」と、先ず気持ちを認めてあげ、ことばをかけてあげることが大事である。また、かじられた子に対しても「○君の車が欲しかったんだね」と気持ちを認め、「貸してというだよ」と言語化してあげることも必要である。感情(大脳辺縁系)とことば(大脳皮質)のやりとりである。

この大脳辺縁系の感情と大脳皮質の言葉との情報のやりとりに関して、大河原美以氏(東京学芸大学教授)は、大人の対応のしかたが大事であると述べている。子どもが感じている不快感情(辺縁系)を、大人がその感情を承認し、言語化(皮質)してあげること、子どもが安心する(辺縁系)という一連のやりとりが不快感情を完全に抱える力(感情制御)の力を育む基になる。そして、子どもの心

理的問題の多くは、感情制御の力が育ちそびれていることに起因しているとして示唆に富む論を展開しているが、ここでは省略する。

0歳児から二歳児の子どもは言葉での表現力が乏しいので、気持ちを言語化してあげる関わりが大事であり、それが大人の役割である。当園は幼保連携型認定こども園なので、0歳児からのお子さんを預かっている。朝の七時から夜の七時まで、つまり子どもが活動している日中での対応である。そんなことを考えれば、不快感情を安全に抱える力を養いながら気持ちを言葉に置き換える取り組みを丁寧に行っていくかなければならない。



お泊り会を終えて

みんなで泊まった☆思い出の夏

Aクラス 田口 千聖

年長の大きな行事の一つである『お泊まり会』が、七月十五日十六日に行われました。

お泊まり会に向けてクラスを2つのグループに分け、それぞれグループ名を話し合ったり、グループの旗を作ったりして気持ちを盛り上げました。また、お泊まり会前日には夕食、朝食の食材を自分たちで買い出し、ドシャ降りの中、頑張つて出かけたことも忘れられない思い出です。事前に分担したメモを見ながら、自分で品物を選んで買いました。夕食のカレーライスを食べながら「僕が買ったニンジンだ。だから、おいしいんだね。」という声も……このような経験ができるのも、快く引き受けて下さった近所の宮沢商店さんのご厚意のおかげです。地域の方に支えて頂いていることに、感謝しております。

自分達で作ったカレーライスを食べた後は、夕暮れの園庭でお楽しみ会☆絵本の中の「ダンブえん

ちよう”から手紙が届き、海賊ダンブ団が来て、子ども達を喜ばせてくれました。様々なゲームや花火を楽しんだ後は、恒例の肝だめし！（これからお泊まり会をする子ども達には内緒ですよ）勇気を出してカードを手に入れた子ども達の表情は、達成感と満足感でいっぱいでした。

この二日間で、ぐんとたくましくなり、自信をつけた子ども達。不安そうに登園してきた子が、次の日お迎えに来た保護者の方にキラキラの笑顔を向けていました。また、安心感から涙がこぼれる子ども、子ども達の成長を間近に感じ、熱い思いがこみ上げました。



朝食は手作りのおにぎり☆

運動会の取り組みから

「がんばるきもち」

Bクラス 向井 里奈

夏も終わりに近づき、みんなのお楽しみは運動会へ。去年を思い出し「晴れるといいな♪」と期待を膨らませ、ぼくも！わたしも！と運動あそびに奮闘するBクラス。中でも、お家の人との親子競技は特別なもの。今年は『せんたくかあちゃん』の絵本から子供たちへと広がった遊びを、競技に取り入れました。ペランダにかけた紐に、洗濯バサミで布団やスカートを干し、タライに入れたカラーボールは虹色の泡、フライ返しは布団叩きへと……。イメージが広がり、たちまち洗濯ごっこが流行ります。最近では、本物の濡れた靴やエプロンも干し、おひさまの光を浴びて乾いた洗濯物に大満足の様情！

かけっこでは、「最後まで走るよ」「転んでも泣かないよ」とそれぞれのがんばりを自慢気にやってみせる姿やお互いを応援し合う姿など、一年前とは違うみんなの



気持ちの変化に嬉しさを感じます。ダンス「スマイル」は、覚えやすい歌詞に自然と体が動き、またCクラスさんと一緒にちよっぴりお兄さん・お姉さん気分も味わいながら踊っています。お決まりの「スマイル」の掛け声と決めポーズは、見ているお客様にも、たくさん笑顔が届けられるのでは？と期待しています。

様々な場面にて、Bクラスみんなそれぞれの「がんばるきもち」が見える運動会になると思っています。一人ひとりのがんばる瞬間を大事に受けとめ、これからもみんなの成長をそばで支え続けたいと思います。

「初めてがいっぱい！」

Cクラス 井上 裕美子

盛岡幼稚園に入つて、初めての運動会を迎えるCクラス。「うんどうかい」という言葉は聞いたことがあるけれど、どんなことをするのかわからない状態でした。

「かけっこ」で、線から出ないでスタートすることが分かったと、

ゴールにも応用し、ゴールの線の手前でストップ！すぐに応用できることには「ありがとう」という気持ちでしたが、今回は残念……。線を越すことが「ゴールになること」と知らせ、かけっこを何度かすると「ぐすん」と鼻をすする声が聞こえてきました。「早く走るほうがいい」というルールがわかる子にとって、最後のほうになることは悔しさを感じる経験でした。普段の遊びでは、あえて勝負のつく遊びに入らない子もいるので、全員参加の競技は子どもたちにとつて心の成長に大きく影響するものだな、と改めて感じています。

開会式もBクラスと一緒のリズムも親子競技も閉会式も、一つ一つが子どもたちにとつて初めての経験です。本番は、雰囲気は圧倒されて固まるかもしれませんが、見てもらえることに嬉しさを感じてより力を出せるかもしれません。子どもたち一人ひとりの感じ方があり、ドラマがあることが行事の面白さでもあると思います。運動会の練習でも本番でも、感じたことは、翌日にも来年にもつながっている大事な一瞬。子どもた

ちがどんな表情でも、家族や先生たちは心から応援し、「見守っているんだよ」と伝わりますように。



みんなで「スマイル」！

保育部の生活より

保育部 林崎 裕子

子ども達の成長は日々、驚くことばかりです。入園当初は新しい環境に不安や戸惑いから泣いていた子がほとんどだったのですが、今では「いつてらっしやい！」「ばいばい」と手を振る子ども達。そして、お気に入りの遊びへ。たくましく成長している子ども達です。最近では保護者の方は笑顔でバイバイする子どもに安心しているのでは？と思います。

夏の遊びが充実して、いよいよ

秋の遊び。保育部でも、園庭や裏庭、散歩に出かける機会が増えてきました。

二歳児いちごクラスでは、散歩ロープを握つてのお散歩。初めは、周りを見る余裕はなかったのですが、今は「行つてきます！」と手を振り、元気に出発。「車たくさん見えたよ」「ジャンゲルジム」高く昇れたんだ！とお土産話に花が咲きます。

一歳児つぼみクラスは、砂遊びに夢中です。砂をバケツにたくさん入れて手を合わせ、お祈りのポーズ。一人ひとりの遊びを見ていると、日々の生活が遊びになっていることを実感します。

0歳児ふたばクラスでは4人から6人増えて賑やかになりました。月齢差があり、自分より、より小さい子にはかわいい手で頭をよしよし。まるで、小さな先生のようにです。

日々の生活の中で愛着・信頼関係を大切に一人ひとりが安心して過ごせるようにと願っています。



編集後記

園庭にトンボが飛ぶようになり、季節はすっかり秋……。年長が植えた夏野菜は今年もたくさん収穫でき、子ども達のお腹を満たしてくれたことはもちろんですが、心も満腹にしてくれました。限られたスペースのなかでしたが、土壌づくりの大事さ、毎日の水やり、そして太陽の恵みが大切だと改めて子ども達から教わりました。力を惜しまず手をかけるということは、子ども達を育てる上でも同じことだと思えます。子ども達がすくすくと成長できるように、より良い環境を整え、たっぷりの愛情と見守りのなかで、一三四名の子ども達一人ひとりがこれからも大きく芽を伸ばしていけるよう職員一同、これからも努めていきたいと思えます。

学校法人 内丸学園
幼保連携型認定こども園
盛岡幼稚園
〒〇二〇〇〇〇二二
盛岡市中央通一六―四七

理事長 坂本 洋

TEL 六二二―二三〇一